越前支配の拠点・北庄城と半石半木の奇橋・九十九橋

柴田勝家が築城した北庄城は、勝家が越前を支配し、織田信長配下の武将として北陸方面に侵攻する上で重要な拠点となりました。

天正3（1575）年に信長は、越前の一向一揆勢を鎮圧して越前を平定し、同年9月2日に坂井郡の豊原寺から北庄に入ると、自ら城の縄張りをして、ここに城を築くように命じました（『信長公記』）。北庄は足羽川と北陸道が交わる水陸交通の便利な場所にあり、戦国期には町場として発達していたので、信長もこの地を選んだのでしょう。

北庄城の石垣
（北の庄城址・柴田公園）

この信長から越前国内の8郡を与えられた勝家は、北庄城主として城と城下町の建設に取り組みます。しかし、城の工事（普請）に必要な人足を領民から一方的に徴発してはいません。できる限り村で耕作に従事できる措置を講じたのです。

同9（1581）年にイエズス会宣教師のルイス・フロイスが北庄を訪問した際のことを、次のように手紙に書いています（「ルイス・フロイス書簡」より）。

〝我等は市の入口の橋を通ったが、（中略）勢多橋と同じ長さで、当市は又安土の二倍あるといふことである。（中略）此城は甚だ立派で、今大きな工事をして居り、予が城内に進みながら見て最も喜んだのは、城及び他の家の屋根が悉く立派な石で葺いてあって、其色に依り一層城の美観を増したことである。〟

最初にフロイスが城下の入口で渡った橋とは、足羽川に架かる九十九橋（大橋・米橋などの呼称もあり）のことを指しています。日本三大名橋として知られた「勢多橋」（瀬田唐橋。滋賀県大津市の瀬田川に架かる。）と同じ長さがあると記していますが、実際は九十九橋の方が短かったようです。この橋は朝倉時代から架かっていましたが、勝家の時代には、愛宕山（現在の足羽山）で産出する笏谷石（凝灰岩）を利用して、石橋と木橋からなる半石半木の構造となっていたようです。

フロイスは、北庄の町は安土の2倍の規模があり、北庄城も大きな城であったことを綴っており、フロイスがやって来た時もまだ城の工事が続いていました。また、城や武家屋敷の屋根が「立派な石」で葺いてあると記されていますが、それは笏谷石の石瓦のことで、この石の持つ独特の青緑の色が、城の美観を高めています。

現在、勝家時代の北庄城を描いた絵図（図面）は発見されていないため、その規模や構造はよくわかっていませんが、同13（1585）年に勝家の最期について書いた羽柴秀吉の書状（「毛利家文書」）には、北庄城は「天主を九重ニ上候」とあり、高層の天守が築かれていたようです。北庄城、九十九橋とも当時としてはスケールが大きかったようで、勝家の勢力の大きさをうかがうことができます。

関連史料・ゆかりの地

九十九橋

足羽川に架かる九十九橋は、明治42（1909）年に木造トラスに架け替えられるまで、半石半木の構造をしていました。昭和61（1986）年に完成した現在の橋は、九十九橋の歴史を感じさせながらも、現代的都市の景観に合うようなデザインになっています。

【住所】福井市照手1丁目からつくも1丁目（ＪＲ福井駅より徒歩15分）

参考資料等　『福井県史』通史編3 近世一　福井県、『福井市史』通史編1 古代・中世　福井市

執筆・協力　福井市立郷土歴史博物館

発行／福井県観光営業部ブランド営業課